

ジョンソンの用例について

——語学観と文学観の関連から——

三 好 楠二郎

※本稿は2009年10月13日に上智大学で開催された「サウンディングズ英語英文学会第60回研究発表会」のSamuel Johnsonに関するシンポジウムにおける基調発表のひとつに若干の加筆を施したものである。

1. はじめに

古来、Samuel Johnsonの*A Dictionary of the English Language*（以下、『辞典』）(1755)は、「語学辞典」として共に「文学辞典」と見られて来ました。そうであれば、彼の語学観と文学観は、『辞典』において、いかに融合したのか。また、規範的な語学意識と文学的趣向が拮抗・対立する場合、彼は、どのように対応したのか。私の発表では、『辞典』のひとつの側面として、Johnsonが、語学者としての自身をベースに、広範な文学的素養を援用して、用例を配当したケースの一端を概観したいと思います。扱う対象は、『辞典』中、取り分け豊富な用例が含まれる頻用動詞と前置詞の項目、そして前置詞に関する副項目となります。多少先走りになりますが、頻用動詞の項目では意味概念に、前置詞の項目・副項目では用法面に主眼が置かれているように見られます。

本題に入る前に、総体的な観点から『辞典』のLから始まる語彙項目をサンプルとして、Johnsonの用例引用の傾向を概観しておきたいと思います。資料1に記しました通り、この項目の数は1,310。そこに配当された用例は、総数

4,047。1項目あたり、平均3.1の用例が配当されている計算になります。

資料1

Scope ---1,310 entries in the L's. (164 sources)

Johnson allocated 4,047 citations in the 1,310 entries from 164 sources: 3.1 citations per entry.

意外と少ない印象がありますが、それら用例の出典は、主に作家別に見て164。その出典を高頻度順に20位まで配列すると、資料2のようになります。

資料2

1. Shakespeare 640 (15.8%); 2. Dryden 480 (11.9%); 3. Bible 270 (6.7%); 4. Milton 165 (4.1%); 5. Bacon 163 (4.0%); 6. Addison 161 (4.0%); 7. Pope 156 (3.9%); 8. Locke 133 (3.3%); 9. Spenser 130 (3.2%); 10. Swift 114 (2.8%); 11. Arbuthnot 65 (1.6%); 12. Prior 60 (1.5%); 13. Hooker 58 (1.4%); 14. Sidney 57 (1.4%); 15. L'Estrange 53 (1.3%); 16. South 48 (1.2%); 17. Brown 42 (1.0%); 18. Boyle 40 (1.0%); 19. Atterbury 31 (0.8%); 20. Mortimer 29 (0.7%).

それぞれからの用例の数値と全体における割合を付しました。取り分け引用頻度の高い出典について確認させて頂くと、1位Shakespeare・2位Dryden・3位Bibleとなります。

なお、Lの項目といえば、『辞典』総体の項目の約3-4%。全体の傾向を反映したサンプルとするには、不十分に思えるかもしれません。しかし、過去に於いて、Lewis Freedという人が、2巻から成るJohnsonの『辞典』の第1巻で500回以上の引用が施されている出典を調査してその数値を、またAllen Readという人が『辞典』のMから始めて10,000の用例を調査してその百分率を、それぞれに、頻度の高いものから、資料3に引用したように示しています。

資料 3

Stenberg (1944:203): “Shakespeare, 8694; Dryden, 5627; Milton, 2733; Bacon, 2483; Addison, 2439; Pope, 2108; Swift, 1761; Locke, 1674; Spenser, 1546; Hooker, 1216; South, 1092; Browne, 1070; Arbuthnot, 1029; Sidney, 762; Prior, 706; L’Estrange, 654; Boyle, 592; Watts, 509. [...] *Old Testament*, 1448; *New Testament*, 508; *Apocrypha*, 267: a total of 2223.”

Reed (1986:37): “Shakespeare 17.2, Dryden 10.0, Bacon 4.6, Milton 4.5, the Bible 4.5, Addison 3.8-4.3, Pope 3.1, Spenser 2.8, Swift 2.1, and Sidney 1.5.”

いま申しましたLの項目の調査結果は、これら2つの調査結果とほぼ同じとなりますので、それに基づいても、格別に大きな問題はないものとして論述を進めさせていただきます。

2. 頻用動詞の項目における用例

それでは、以上を前提に、先ず、『辞典』の頻用動詞の項目に見られる用例の観察に入らせて頂きます。調査対象は、資料4に示しました動詞に関係する項目28。

資料 4

Scope---28 entries on verbs of high frequency: *bear (v.a.)*, *bear (v.n.)*, *break (v.a.)*, *break (v.n.)*, *cast (v.a.)*, *cast (v.n.)*, *come (v.a.)*, *fall (v.n.)*, *fall (v.a.)*, *get (v.a.)*, *get (v.n.)*, *give (v.a.)*, *give (v.n.)*, *go (v.n.)*, *make (v.a.)*, *make (v.n.)*, *put (v.a.)*, *put (v.n.)*, *set (v.a.)*, *set (v.n.)*, *run (v.n.)*, *run (v.a.)*, *take (v.a.)*, *take (v.n.)*, *throw (v.a.)*, *throw (v.n.)*, *turn (v.a.)* and *turn (v.n.)*.

Johnson allocated 1,551 sub-entries in the 28 entries: 19.7 sub-entries per entry.

Johnson allocated 1,496 citations in the 28 entries from 101 sources: 53.4 citations per entry.

1 (1). Bible 249 (16.6%): 2 (2). Dryden 183 (12.2%): 3 (3). Shakespeare 165

(11.0%).

これは、Johnson自身が『辞典』の「序文」中第45パラグラフで列挙した頻用動詞の諸例です。略号“*v.a.*”と“*v.n.*”は、“verb active”・“verb neuter”を表示し、各々、他動詞と自動詞に相当します。

さて、『辞典』の頻用動詞の項目を観察する際、最初に認識すべき事柄として、これらの動詞が列挙されている「序文」の第45パラグラフで、Johnsonは、『辞典』における頻用動詞の扱いについて、自らの苦渋を語っています。資料の5と6で、その発言から2か所を取りだしました。

資料 5

Johnson (1755: par. 45 in the “Preface” to the *Dictionary*): “My labour has . . . been much increased by a class of verbs too frequent in the *English* language, of which the signification is so loose and general, the use so vague and indeterminate [...].”

資料 6

Johnson (1755: par. 45 in the “Preface” to the *Dictionary*): “If of these the whole power is not accurately delivered, it must be remembered, that while our language is yet living, and variable by the caprice of every one that speaks it, these words are hourly shifting their relations, and can no more be ascertained in a dictionary, than a grove, in the agitation of a storm, can be accurately delineated from its picture in the water.”

先ず、5に関連して、Johnsonは、頻用動詞について、「意味が非常に漠然とし、用法は曖昧で定めがたい」と述べています。そして6。Johnsonは、『辞典』の使用者に向けて、「当該の動詞の扱いで自身の力が及ばない場合、それは、それらの動詞が、今なお時々刻々と意味概念を変えていることによるため」という旨の「断わり」をしています。

実際、『辞典』本体の関係する項目を開きますと、資料7に引用した*bear*や

goの定義が見られます。

資料7

Johnson (*Dictionary*): To BEAR. v.a. 1.

This is a word used with such latitude, that it is not easily explained.

Johnson (*Dictionary*): To GO. v.n. 68.

The senses of this word are very indistinct: its general notion is motion or progress.

ここで**bear**は「余りにも広い意味で使用されるため、容易に説明できない」、**go**については「この語の意味は非常に定め難い。およその概念は動きや進捗である」等とされています。

しかし、同時に、Johnsonは、このような「一種の敗北の吐露」と言えるならば、それを、いわば「戦わずしてなし」た訳ではありませんでした。再び資料の4をご覧くださいと、そこに、調査の対象とした28の項目に関する副項目の数と用例の数を示させて頂いています。なお、調査の純粹性を保つ目的から、それぞれの項目における成句に関係する副項目は、一切、除外していることをご了承願います。

その上で、Johnsonは、該当する28の項目に、総計1,551の副項目を与えました。こうした数値を見る時、Johnsonが、執拗なまでに頻用動詞に取り組んできた経緯の一端が覗えるのではないのでしょうか。そして、該当する項目に見られる用例は、1,496。1項目あたり53.4となります。これは、『辞典』全体の傾向を示すとさせて頂いたLの項目の場合における3.1の17.2倍に相当します。

その上で、あとひとつの観点から注目すべきは、頻用動詞の項目に於いて、かくまでも、Lの項目を夥しく上回る用例を配当しながら、Johnsonが、その出典については、逆に、Lの項目の場合よりも狭めている事実です。Lの項目の場合、出典数は164でした。頻用動詞の項目の場合は、それを63下回る101。すなわち、Johnsonは、頻用動詞の項目に於いては、引用すべき出典に一定の制限を設け、その制限のもとに、膨大な用例を配当したことになります。

では、制限された出典とは、いかなるものであったのか。その点を考える上で、頻用動詞の項目で、それぞれに1・2・3位を占めるBible・Dryden・Shakespeareからの用例の合計と、Lの部におけるそれらの合計について、数値上の比較を試みると、まず、頻用動詞の項目の場合には597で全体の用例の中で占める割合は40.0%です。Lの部の場合には、調査範囲が広い以上、自然、3種の合計は、頻用動詞の場合よりも多く1,390となりますが、全体の中では34%しか占めていません。すなわち、この数値は、頻用動詞の項目では、比率上、『辞典』全体の傾向と比較して、聖書と共にDryden・Shakespeare等の文章が群を抜いて多くなっていることを示していることとなります。

ここで、以上に述べさせて頂いた『辞典』の頻用動詞の項目における全体の傾向性についてまとめますと、始めに見た、Johnsonが苦渋と共に「当該の動詞の意味は、時々刻々と変化している」と認め、基本的に、その歴史認識に対応した姿勢を取った事実は、彼が、規範性よりも、むしろ、その対極にある記述性に重きを置いたことを意味していると言って良いのではないのでしょうか。

その一方、この記述性は、突飛な引き合いになるとは思いますが、例えばWebster 3版に見られるごとき記述性等とは、一線を画するものであった。それは、頻用動詞の項目で選択された用例が、Lの部の場合と比較して制限された出典からのものであった点に伺えます。このように見る時、やや荒削りな表現になりますが、いわば、『辞典』の頻用動詞の項目における用例は、聖書およびJohnsonが首肯する文学作品に見られる該当の動詞について、記述的に扱ったもの——そのような見方が可能になると思われます。

3. 前置詞の項目における用例

次に、Johnsonは、前置詞をいかに扱ったか。この点について、始めに資料8をご覧ください。

資料8

Scope---19 entries on prepositions: *about, after, at, before, below, by, down, from, for,*

in, into, of, off, on, over, through, to, upon and with.

Johnson allocated 257 sub-entries in the 19 entries: 13.5 sub-entries per entry.

Johnson allocated 618 citations in total in the 19 entries from 83 sources: 32.5 citations per entry.

1 (1). Dryden 114 (18.4%): 2 (2). Shakespeare 89 (14.4%): 3 (22). Bible 6 (1.0%)

頻用動詞の場合と異なり、前置詞について、Johnsonは具体例を挙げていません。そこで、調査する項目の選択は、調査者に委ねられることとなります。私としては、ここに列挙した19の前置詞に関連する項目を選択しました。なお、頻用動詞の項目の場合と同じく、以下、成句に関係する副項目を含まない前提での論述となります。

前置詞の扱いについて、Johnsonの回顧は、頻用動詞の場合と大きく異なります。資料には、やはり、関連する「序文」の箇所を、分割して抜粋致しました。9と10です。

資料 9

Johnson (1755: par. 46 in the “Preface” to the *Dictionary*): “The particles are among all nations applied with so great latitude, that they are not easily reducible under any regular scheme of explication: this difficulty is not less, nor perhaps greater, in English, than in other languages.”

資料 10

Johnson (1755: par. 46 in the “Preface” to the *Dictionary*): “I have laboured them with diligence, I hope with success; such at least as can be expected in a task, which no man, however learned or sagacious, has yet been able to perform.”

先ず、9。前置詞を含む小詞または不変化詞について、Johnsonは、この種の

語を、「甚だ広範囲に用いられ、通常の処理方法で扱えるものではない」としてしています。ここまでは、頻用動詞の場合と同じ論調です。しかし、これに続く10. この箇所は、苦渋の吐露に終始した頻用動詞の場合と鮮やかな対比を示しています。すなわち、「自分は、誰人といえども、到底、なし得ないであろう結果をもたらすことができたものと思う」と。自信に横溢したJohnsonの発言です。

以上のもと、再度、資料8をご覧くださいと、前置詞の項目で調査対象と致しました19の項目に配当された用例は、総計618。1項目あたり平均32.5となります。これは、Lの項目の場合の3.1と比較して10.5倍となり、頻用動詞の場合と同じく、かなり多い数値と考えられます。

しかしながら、前置詞の項目に引用された例文の典別頻度を見ると、そこには、数値上、Lおよび頻用動詞の項目には見られなかったふたつの傾向が表れています。ひとつは、聖書からの用例が、極めて少ないこと。既に見た通り、Lおよび頻用動詞の項目で、聖書からの用例は、それぞれ、全出典の中で、3位以上を占めていました。ところが、前置詞の項目では、全83の出典の中で、実に、22位。割合で言えば、全618の用例の中で6しか見られず、詳細に及べば、1%をも下回る0.97%です。

あとひとつは、これと逆に、Drydenからの用例が、突出している事実です。Lの項目の第1位はShakespeareで、全用例の15.8%、頻用動詞の項目の第1位は聖書であり、16.6%でした。これらに対して、前置詞の項目で第1位を占めるDrydenからの用例は、ほぼ2割に近い18.4%。

このような、多数に及ぶDrydenの用例と、反面、余りに僅少な聖書の用例——この格差は、いかなる理由によってもたらされたのか。その問題を考える時、先ず、Drydenが、同時代の文人たちの間で、格別に前置詞の用法に注意を払った人であった事実が想起されます。以下、この点を巡って、多少の論述を試みさせて頂きたいと思います。

時は1684年。この年、Drydenは、16年前前に出版され、批評家としての彼の名を高めていたDramatic Poesy『劇詩論』の再版を刊行しました。その再版の

主眼は、作品で用いられた前置詞の位置の修正にありました。具体的には、*Dramatic Poesy*の再版で、Drydenは、初版で文・節または句の終わりに置かれていた前置詞について、その総てを削除するか、または位置を移動させたのでした。Drydenによる、この行為について、Janet Batelyという研究者が、優れた論考を残しています。氏は、*Dramatic Poesy*の初版と再版で、どのように前置詞の位置が変更されたかを詳細に例示しています。資料11は、その具体例から、表記法に若干の変更を加えて、3つほど呈示したものです。

資料11

From Bately (1964, 269-270): 1668---‘whom all the Story is built upon’; 1684---‘on whom all the Story is built’ / 1668---‘such Arguments . . . as the fourth Act of Pompey will furnish me with’; 1684---‘as those with which . . . furnish me’ / 1668:--‘people you speak of’; 1684---‘people of whom you speak’

ここで、Drydenが、どのように、文・節・句の末尾にあった前置詞を移動させたか、その概要が推量されるかと存じます。

若干の付言をすれば、「前置詞は関係する語の前に置かれるべし」という考えは18世紀で大勢を制していたものであり、この世紀を風靡した文法家Robert Lowthも、資料12に示させて頂いたように、その旨を明記しています。

資料12

Lowth (1762:91): PREPOSITIONS, so called because they are commonly put before the words to which they are applied [...].

以上から垣間見られる *Dramatic Poesy*の再版におけるDrydenの前置詞の用法が、Johnsonの規範意識に合致していたであろうことは、ふたつの角度から推察され得ます。

ひとつは、資料13に引用した『辞典』における前置詞の項目の内容。

資料13

Johnson (Dictionary): PREPOSITION. *n.s.*

In grammar, a particle governing a case.

A *preposition* signifies some relation, which the thing signified by the word following it, has to something going before in the discourse; as, Cesar came to Rome. *Clarke's Lat. Gram.*

そこに引用されたラテン文典の一節には、前置詞が「『それに続く』語によって示される事物との関係性を示す」とあり、この引用がJohnsonの意図を表示しているとすれば、原則として、文・節・句の末尾への前置詞の配置はJohnsonによって許諾されないことになり、*Dramatic Poesy*の再版を境として生じたDrydenの考えと一致します。そして、これを補完するものとして、資料14。『辞典』のonの項目におけるふたつの副項目ですが、いずれも、前置詞が、関係する語の前に配置されるべく指示をしています。

資料14

ON. *prep.* 2.

It is put before any thing that is the subject of action.

Th' unhappy husband, husband now no more,

Did *on* his tuneful harp his loss deplore. *Dryden.*

ON. *prep.* 12.

In forms of denunciation it is put before the thing threatned.

Hence *on* thy life; the captive maid is mine,

Whom not for price or pray'rs I will resign. *Dryden.*

あとひとつは、補足になりますが、Johnsonが引用したDrydenの作品との関係です。当該の前置詞の項目の調査範囲で、Johnsonは、全114のDrydenの用

例の内、48に作品名を記しています。それら48の内、大半を占める32が、Drydenの前置詞観の確立を物語る*Dramatic Poesy*が再版された1684年以降のものとなっています。その分布は、資料15に示させて頂いた通りです。

資料15

The 32 citations from Dryden: 1 from *Albion and Albanus* (1685), 2 from *Don Sebastian, King of Portugal* (1690), 2 from *Satires of Decimus Junius Juvenalis* (1693), 20 from *Works of Virgil [...] Translated into English Verse* (1697) and 7 from *Fables, Ancient and Modern* (1700).

Johnsonは、文学者としては、Drydenの作品を、ほぼ全体を通して高く評価しており、1779年以降Johnsonによって著された*Lives of English Poets*『詩人伝』の内『ドライデン』の部には、*Dramatic Poesy*再版の1684年を遡る作品についても、資料16に引用させて頂いた通り、数々の賛辞が与えられています。

資料16

Johnson (1779: 247): “It was not till the death of Cromwell, in 1658, that he [Dryden] became a publick candidate for fame, by publishing *Heroic Stanzas on the late Lord Protector*; which, compared with the verses of Sprat and Waller on the same occasion, were sufficient to raise great expectations of the rising poet.”

Johnson (1779: 251): “[*Annus Mirabilis* (1667)] may be esteemed one of his [Dryden’s] most elaborate works.”

Johnson (1779: 276): concerning *Absalom and Achitophel* (1681)--- “There is no need to enquire why those verses were read, which, to all the attractions of wit, elegance, and harmony, added the co-operation of all the factious passions, and filled every mind with triumph or resentment.”

1658年にLord Protectorに捧げられた一詩は、SpratやWallerが同年代であっ

た頃の詩よりも優れているとされ、1667年の作品 *Annus Mirabilis* は Dryden の生涯で有数の労作とされ、そして、1681年の *Absalom and Achitophel* に至っては、絶賛と言って良い評価が与えられています。しかし、作品名が記された Dryden からの当該の用例48の中で、これらの作品からのものは、ただの1つも見られないという実情があります。もしも、残る作品名が付記されていない Dryden の用例の中に、これら3種の作品からのものが含まれていなければ、前置詞の項目で、Johnsonは文学的な秀逸性と語学的な規範意識を対峙させ、終局、前者を放擲し、後者を選択した可能性が濃厚になるでしょう。

さて、前置詞の項目における用例について、あとひとつ特異な事実がありました。聖書からの用例がほぼ皆無に等しいという事実です。結論から言えば、これは、前置詞の項目の用例に Johnson の規範的な語学意識が反映しているためと判断して良いと思われます。先ず、Johnsonは聖書にどのような呼称を与えているか。資料17の下線を施させて頂いた部分をご覧ください。

資料17

Johnson (1755: par. 62 in the “Preface” to the *Dictionary*): “the language of theology were extracted from *Hooker* and the translation of the Bible; the terms of natural knowledge from *Bacon*, the phrases of policy, war, and navigation from *Raleigh*; the dialect of poetry and fiction from *Spenser* and *Sidney*, and the diction of common life from *Shakespeare* [...]” (下線部発表者)

『辞典』の「序文」に於いて、Hooker・Bacon・Raleighなど他のいくつかの『辞典』の出典と共に、Johnsonは、聖書を、こう呼んでいます——“the translation of the Bible”。単に“Bible”ではない。“English Bible”でもありません。彼にとっては、英訳聖書が、あくまで翻訳であったことを示す一節です。その上で、資料18。

資料18

Johnson (1755: par. 90 in the “Preface” to the *Dictionary*): “No book was ever turned from one language into another, without imparting something of its native idiom; this is the most mischievous and comprehensive innovation; single words may enter by thousands, and the fabrick of the tongue continue the same, but new phraseology changes much at once; it alters not the single stones of the building, but the order of the columns.”

同じく『辞典』の「序文」からの引用ですが、そこには、翻訳なるものが、いかに国語の純粹さを乱すかが、主張されています。

Johnsonは、篤き信仰の人であったとされます。先に見た、一面、言語変化への認識が投影されているとさせて頂いた頻用動詞の項目の用例の中では、聖書から最多の引用がなされていました。ここにも、Johnsonの信仰心の表れを見ることが可能かもしれません。しかし、語学的な規範意識が濃厚に働いている場合、事情は異なるようです。ここに、私たちの前に、信仰の人Johnsonとは区別される、規範的語学者としてのJohnsonの姿が、垣間見られる思いがいたします。

4. 「動詞・前置詞」・「形容詞・前置詞」の結合に引用された用例

さて、英語における前置詞の用法と言えば、あとひとつ大きなテーマがあります。それは、いかなる動詞または形容詞に、いかなる前置詞が伴われるべきか、という問題です。例えば、「何かに対して怒る」という意味を持つ表現をする際、*angry*に後続する語には*at*と*with*のいずれが伴うのか。それぞれに正しいとすれば、規範的には、どのような使い分けがなされるべきか。そうした選択の問題です。Johnsonも、『辞典』の成立を遡る8年前、この問題に強い関心を寄せ、1747年に執筆された『辞典』の「計画書」で、その一部を資料19に示したように述べています。

資料19

Johnson (1747:18-19): “we say, according to the present modes of speech, the soldier died *of* wounds, and the sailor perished *with* hunger [...]. [...] we must remark how the writers of former ages have used the same word, and consider whether he can be acquitted of impropriety [...].”

全体の趣旨として、「この種の表現の正用法が定められるべし」と。

やがて完成した『辞典』の「序文」では、この問題について触れられてはいませんが、『辞典』本体に於いては、Johnsonは、濃厚に規範的な態度で、用例を駆使しつつ彼の語法観を論じています。実は、この種の問題は18世紀の文法家の間で大きな論争をもたらしたものであり、当該世紀の英語思想を扱った研究書としては古典的名著とされる Sterling Leonard という人の *Doctrine of Correctness in English Usage 1700-1800* に於いて、資料20に引用した「(18世紀に於いては) 前置詞の用法に関する規則の確立について、格別の労苦が払われた」旨の一文から始まって相応のページ数に渡って論じられています。

資料20

Leonard (1962: 112): “An extraordinary elaboration is devoted to rules on uses of prepositions [...].”

ここでは、資料21に示させて頂いた24の関連表現を調査範囲として、論述を進めさせて頂くことに致します。

資料21

Scope---24 sub-entries on the following expressions: *abstain from, afraid of, angry at/with, apologize for, apply to, argue with/against, ashamed of, associate with, averse from/to, believe in/on, capable of, comment upon/on, compare to/with, conscious to/of, count upon, disgust/disgusted at/with/from, glad of/at/with, independent on/of/from,*

invest in/with, mad on/after/off/for, object to/against, prefer above/before/to, proud of and worthy of.

Johnson allocated 73 citations in total in their relevant 24 sub-entries from 60 sources: 3.0 citations per expression.

1 (1). Dryden 17 (23.3%): 2 (2). Shakespeare 8 (11.0%): 3 (3). Bible 7 (9.6%)

いずれも『辞典』で扱われている表現ですが、これらの表現の収集につきましても、いま申しました Leonard の著書と併せて、現代英語の分野ながら Randolph Quirk 他による伝統文法大成の書とも見なされている *Comprehensive Grammar of the English Language* をも参照致しました。一応、これら 24 の表現と関連する副項目における用例の合計数は 73。1 表現あたりの平均は 3.0 となります。出典については、ほぼ無作為に選んだ 24 の表現ですが、その中で、やはり、Dryden の用例が数値の面で突出していることが注目されます。

以上を前提として、Johnson が「動詞・前置詞」と「形容詞・前置詞」の結合について扱う場合の基本スタイルは、資料 22 に示させて頂いた通りです。

資料 22

ANGRY. *adj.* 2.

It seems properly to require, when the object of anger is mentioned, the particle *at* before a thing, and *with* before a person; but this is not always observed.

Your Coriolanus is not much missed, but *with* his friends; the commonwealth doth stand, and so would do, were he *angry at* it. *Shakespeare's* Coriolanus.

Now therefore be not grieved, nor *angry with* yourselves, that ye sold me hither: for God did send me before you to preserve life. *Gen.* xlv.5.

I think it a vast pleasure, that whenever two people of merit regard one another, so many scoundrels envy and are *angry at* them. *Swift.*

この例は、**angry** の第 2 副項目の内容であり、該当の形容詞について *at* と *with*

の使い分けが論じられている箇所ですが、ここに見られるように、Johnsonは、通常、最初に彼の語法規範を述べ、これに続けて関連する用例を引用しています。例文の中で、Johnsonが見出し語と共に、関連する前置詞をイタリック体にしてある点にご注目ください。ひとつの特徴と思われます。そして、引用されている用例は、必ずしも彼の語法規範と一致するものではありません。この副項目に於いては、Shakespeareおよび聖書の用例が「正用法」の例であり、Swiftの用例は「誤用法」の例となります。

このような体裁で用例の引用と共に語法規範が論じられている24の表現に関わる『辞典』の副項目——それらは、いずれも相応に興味深いのですが、ここでは、文法思想史の上から大きな関心が持たれてきた *averse from/to* に関連する副項目を中心に、内容を一瞥したいと思います。

何かを嫌悪する表現をする時に用いられるこの形容詞 *averse* について、後続する対象にいかなる前置詞が用いられるべきか——これは、18世紀全体と19世紀初期に及んで、文法家たちの間で盛んに論議された問題でした。先に挙げたLeonardは、JohnsonとLowth等は「*from*が用いられるべき」とし、その一方、George Campbell・Lindley Murray・Swift等の文法家・作家は「*to*が用いられるべき」とした、としています。そして、Leonardは、Clarendonの立場は曖昧であった、と続けています。ここで、参考までに *OED* を一瞥すると、資料23に示させて頂いたように、そうしたLeonardの指摘した内容が、更に詳細に記されています。

資料23

OED : “Examination of many instances shows that *from* has been used by Donne, Speed, R. Burton, Milton, Bp. Montagu, Sir T. Browne, Evelyn, Hale, Dryden, Pope, Johnson, Southey, Motley, Lowell, and J. R. Green; *to* by Heylin, Walton, Boyle, Locke, South, Addison, Steele, De Foe, D. North, Richardson, H. Walpole, Gibbon, Burke, Buckle, Mill; whilst Sir E. Sandys, Jer. Taylor, Barrow, Clarendon, Swift, Hume, Macaulay have used both. Shakespeare does not use the word.”

 (cf. According to Sterling Leonard (1962:133 and 294), while Johnson and Lowth claimed that *from* was appropriate, other grammarians and men of letters, such as George Campbell, Phillip Withers, Murray and Swift, had the opinion that *to* should be used; Leonard further commented that Clarendon's view of the combination was rather vague.)

さて、Jonson です。彼は、*averse from* の正当性を論じる目的から、『辞典』の *averse* の項目に、ふたつの副項目を設けました。資料24です。

資料24

Johnson (*Dictionary*): AVERSE. *adj.* 3 and 4.

3. It has most properly *from* before the object of aversion.

Laws politick are never framed as they should be, unless presuming the will of man to be inwardly obstinate, rebellious, and *averse from* all obedience unto the sacred laws of his nature. *Hooker*, b. i.

They believed all who objected against their undertaking to be *averse from* peace. *Clarendon*, b. viii.

These cares alone her virgin breast employ,
Averse from Venus and the nuptial joy. *Pope*.

4. Very frequently, but improperly, *to*.

He had, from the beginning of the war, been very *averse* to any advice of the privy council. *Clarendon*, b. viii.

Diodorus tells us of one Charondos, who was *averse* to all innovation, especially when it was to proceed from particular persons. *Swift on the Dissensions in Athens and Rome*.

ひとつは *averse from* という「正用法」を示すため、あとひとつは *averse to* とい

う「誤用法」を示すためです。注目されるべきは、Johnsonが、これらの副項目を、いつに *averse* の「正用法」と「誤用法」を示すためにのみ設けている事実であり、ここに当該の見出し語の意味・概念については、何ら見られません。そして、更に興味深いことに、それぞれの引用は、先に触れた Leonard の見解を立証するかのように思えると共に、語学者としての Johnson が文学者としての Johnson の才を援用してなされているように思えます。すなわち、Swift の文章が「誤用法」 *averse to* の例証とされ、Clarendon の文章が、その「誤用法」と、「正用法」 *averse from* の両方の例証とされています。

ちなみに、今一度 *OED* を参照すると、資料25のように、Johnson が *averse from* を選択した理由は *averse* の語源によるものであり、それに拘泥しなければ、*averse to* が正当化される旨が記されています。

資料25

OED (*averse a. and sb.A.4.b.*): “The use of the prep. *to* rather than *from* after *averse* and its derivatives [...]” “[...] although condemned by Johnson as etymologically improper, is justified by the consideration that these words express a mental relation analogous to that indicated by *hostile*, *contrary*, *repugnant*, *hostility*, *opposition*, *dislike*, and naturally take the same constitution.”

Johnson の *averse from* への「こだわり」は、他の表現に関する語法規範にも影響を及ぼしています。その一例は、*disgust* に後続する語に用いられるべき前置詞について。この語に関係する項目の副項目ふたつで、彼は、資料26のように、それぞれ Atterbury と Watt そして Swift からの用例を施して、*disgust at/with* と *disgust from* について論じています。

資料26

Johnson (*Dictionary*): To DISGUST. *v.a.* 2 and 3.

2. To strike with dislike; to offend. It is variously constructed with *at* or *with*.

If a man were *disgusted at* marriage, he would never recommend it to his friend.
Atterbury.

Those unenlarged souls are *disgusted with* the wonders which the microscope has discovered. *Watt's Impr. of the Mind.*

3. To produce aversion: with *from*.

What *disgusts me from* having to do with answer-jobbers is, that they have no conscience. *Swift.*

第3副項目の“To produce aversion: with *from*”が注目されます。この副項目で、先に *averse* の副項目で「誤用法」として挙げられた用例の出典のひとつSwiftが、今度は、「正用法」の用例の出典となっています。

以上、「動詞・前置詞」と「形容詞・前置詞」の結合に関連する表現の内、いくつかの副項目を見てきました。

前置詞の用法に関して、Johnsonは、おおむね、*averse from*に象徴されるように、語源に基づいた18世紀の規範的色彩が強い語法観に基づくことが覗えるのですが、ここに、ある意味、Johnsonの前置詞にまつわる処理方法の真骨頂があるのかもしれませんが。そして、その語法観に基づいて、用例を配当した。また、彼が提示した「誤用法」の例。Johnsonの用例と言えば、往々にして「すべからく範とすべき卓抜した作品の秀逸な表現の数々」とされますが、ここでは一部だけを見たものの、そうした「誤用法」の呈示は、そのような見解に、大きな疑問を投げかけるものと思われまます。

5. むすび

以上、これにて、本日、予定させて頂いていた私の発表の中心を終わらせて頂くこととなります。発表の趣旨を確認させて頂きますと、同じ頻用語とはいえ、頻用動詞と前置詞のそれぞれにおきまして、Johnsonの用例配当の在り方が、彼の各々に対する語学観によって著しく異なること、しかし、いずれの場合も、それらの用例につきまして、初めに申しました、Johnsonが、語学者と

しての自身を中心に据えて、自らの文学的資質を援用して配当されたもの、ということ——その可能性の指摘がありました。

最後に、今回は、ひとつの角度から、頻用動詞の項目と前置詞に関係する項目・副項目を扱わせて頂きましたが、更には、助動詞や Quirk が primary verbs と呼んだ *be · do · have* の場合はどうなのか。更に、一般には、Johnson がほとんど扱っていないと思われがちながら、実は『辞典』に積極的かつ肯定的に豊富に収録されている動詞副詞結合の場合はどうなのか。私自身、これらのいくつかについて、若干の調査を試みた経緯があるものの、今後、『辞典』において、語類別に用例に関する研究・考察が旺盛になされるならば、語学者 Johnson と文学者 Johnson の関わりの実像が大きく浮き彫りにされてくるものと存じます。『辞典』が発刊されて今日に至るまで 254 年。しかるに、私見では、『辞典』の内実に踏み込んだ詳細な考察は、まだ端緒についたばかりに思えます。

ご清聴、ありがとうございました。

参考文献

1. 辞書

(A) *Dictionary of the English Language* (1st edition) (2 vols.) by Samuel Johnson (1755). Facsimile reprint, Tokyo: Yushodo, 1983.

(The) *Oxford English Dictionary* (2nd edition) (20 vols.) by J.A. Simpson, E.S.C. Weiner, et al. (eds) (1989). Oxford: Clarendon Press, and New York: Oxford University Press.

2. 単行書および論文

Bately, Janet A. (1964), 'Dryden's revisions in the *Essay of Dramatic Poesy*', *Review of English Studies*, XV, 268-282.

Freed, Lewis (1939), 'The sources of Johnson's dictionary' (unpublished Ph. D. dissertation at Cornell University).

Johnson, Samuel (1747), *The Plan of a Dictionary of the English Language*. Facsimile reprint, Menston: Scholar Press, 1970.

_____ (1779), *The Life of Dryden*. Reprint, *The Works of Samuel Johnson*, LL. D. vol. 7. London: Talboys and Wheeler, and William Pickering, 1825, 245-360.

- Leonard, Sterling Andrus (1962), *The Doctrine of Correctness in English Usage 1700-1800* (a reissued edition) (originally published in 1929 as Number 25 in the University of Wisconsin Studies in Language and Literature). New York: Russell & Russell.
- Lowth, Robert (1762), *A Short Introduction to English Grammar*. Facsimile Reprint, Menston: Scholar Press, 1969.
- Quirk, Randolph, et. al. (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Read, Allen Walker (1986), 'The history of lexicography' in Ilson, Robert (ed.) *Lexicography: an Emerging International Profession*, Manchester: Manchester University Press, 28-50.